



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
 ©1984 精道教育促進協会 (産屋) 三・三四五二 宮尾市船戸町12-6

教皇様の叢

神に選ばれた者として

神の国のために働く人々の真髄は祈り

父なる神と主イエズス・キリストのうちにあるみなさん、私たちに与えられた聖霊の真理と愛のうちにあるみなさん、みなさんの上に、恩寵と慈悲、平安がありますように。

修道者や修道者の道を歩まんと準備なさっているみなさんに出会い、私の心は喜びと感謝と希望に包まれています。みなさんと集う今、超自然としか言いようのない何かを激しく心に伝わってくるのをおぼえます。あたかも、かけがえのない人々との一度かぎりの集いであるかのような印象を受けています。神の恩寵のおかげで私もイエズス・キリストの司祭ですが、司祭職と修道生活を敬う心は日増しに強くなっています。司祭職や修道生活はキリストの神秘体である教会を代表し、教会の使命と生命と宝に貢献していることがわかるからです。教皇は主のうちにみなさんを心からお愛ししています。私たちの心は通い合い、絶えることのない兄弟愛によって結ばれています。そして、聖マリアの母性愛に満ちた眼差しを受けながら、聖なる教会の「体」という神秘にみちた現実を感じとれる気がし

ています。聖母をすこぶる強く愛し敬うこのファチマで、心をこめて聖母にあいさつをお送りした今、みなさんにお願ひしたいことがあります。どうぞ、聖母のすばらしい模範を見做ってください。みなさんの「兄」として、全ての人を代表して、聖母の祝福を願います。「慈しみ深い御母、ご胎内の御子イエズスをお示しください！」

聖母の祝福とご保護のもと、信頼にみちて父なる神に心をあげ、感謝をおささげしましょう。神様が私たちを愛してくださいますから、「神様が先に私たちを愛し」てくださいましたから。先手を打ったのは私たちでも両親でもない。この世に生まれ洗礼を受けて教会の一員となったのは私たちのわざではありません。御子を通して聖霊から生まれる第一の原理、すなわち「元々の愛」がイニシアティブをお取りになったのです。(…)

キリストのみなさんに対する責任

心を神のうちに潜め、ふたたび聖母を見つめましょう。そして、聖母の優しいお答えを

心にかがいてみましょう。「イエズス・キリストを捜しているのですか。よくごらん下さい。主のしるしのうちにキリストを見出すことができますでしょう。こんなにたくさんのしるしがありますよ！」さらに、私は姿をかくしたい気持ちになりますが、聖母はこうつけ加えられるのではないのでしょうか。「そのしるしとは教皇です。教皇は本来の自分を超えた存在です。教皇はイエズス・キリストに自分の姿を貸しているにすぎないのですから」この姿ということばを使って、私は、自らの無力とキリストのみなさんに対する大きな責任をこの身に感じていることを明らかにしたいと思います。

主が「ご自分の人々」と一緒にいらっしやったときのことを思い出します。そのときから主は、弟子たちをしもべとは呼ばず友人とお呼びになりました。(ヨハネ15・14) 主は弟子たちに心をお打ちあけになる。群衆をわれに思ってお話になります。あたかも群衆は「牧者のない羊」「穫り入れ時に働き人のいない畑」のようでしたから。そして、主の穫り入れに「はい」と答えて働くとはどういう意味かを教えてくださいました。物質的な保証(マテオ10・9)も能力も(同上20)ないが、

純朴な心で神の御力に全幅の信頼をよせ、恐れと勇気の混じる心で「はい」と答える——そのような態度の意味を教えてくださいました。最後に主は、「ご自分の「友人」に向かい、彼らの琴線に触れ、腹藏なくお話になりました。

私教皇も、本日は、「友」の「しるし」を見ることがなく、同じようにはっきりとお話したいと思えます。

神に選ばれて

司祭、修道者のみなさん、みなさん方はある日、心おしみなく全てをささげ、福音に仕える決心をなさいました。みなさんは「選ば

れたのです。(ヨハネ15・16) 神に召されたのです。神はこの特別な召し出し、すばらしい賜を託されました。全教会を代表して、「行って実を結び、その実を残すために」みなさんは呼ばれたのです。(…)

みなさん、神は「一日中の労苦と暑さ」も種々の困難があることもよくご存じです。神は忠実な御方ですから、召しだしに堅忍し、つねに喜んで召しだしに応えるために、必要な恩寵を必ず与えてくださいます。もちろんみなさんも従順で寛大な心を保つよう努めることでしょうか。(…) 神様に心を閉ざすようなことはできません。御父に対して心を閉ざし、御父のほんとうの子供になるのを拒み、人々や兄弟に仕えるのを拒む——このようなことがどうしてできません。(ナチアンスの聖グレゴリオ)

キリストこそ唯一の道

一人ひとりの方とゆっくり時間をかけて、みなさんが神様とどのような愛のことばを交して来られたのか、伺ってみたいと思います。それぞれが歩んで来られた美しい一生、洗礼に始まり、「すべてを捨てて」キリストに従うまでの道、それから、神に選ばれた者として、キリストと共に歩んできた道について、お聞かせねがいたい気持ちで一杯です。しかし、残念ながらそれは無理な注文ですから、せめてみなさん方一人ひとりが私と個人的に話しているつもりでお聞きくださいますように。申し上げたいのは次のことです。キリストこそ、唯一の道、生活の尺度であり、目的である。キリストこそ、「よい知らせ」をもたらす御方、ご自分を「天の国のために」余すところなくお捧げになった御方であるというところ。いろいろ「冒険」について順に見てゆくこともできるでしょうが、今はひとつ、清貧の精神を例にとってみましょう。「心の貧しい人はしあわせである。天の国は彼らのもの

だから。(マテオ5・3)

今日の社会は、所有することに価値を与え、自分の利益や安楽だけを追求し、贅沢にの心をうばわれている。ところが一方では、これとは対照的にみじめな状態の人々も大勢いる。このような社会において、貧しさ、とくに清貧の心は社会に対する挑戦であります。裕福な人も貧しい人も含め、すべての人々ととっての挑戦であります。福音の説く清貧を誓願のもとに実行すべき人々にとっては特別な意味で挑戦であると言えましょう。

福音の説く清貧とは、ただ単に、物をもたないことではありません。むしろ、自分自身を捨てること、「自己を引き渡してしまおう」とことです。キリストは、「価の高い真珠を一個みつけると、もちものを全部売りに行き、それを買ってしまう商人」についてお話になりました。(マテオ13・46参照) キリストはより高いぬうちものを選ぶことを高く評価されます。ところで、「価の高い」ものは、知恵を働かせなければ入手することはできません。ペトロは正しい選択をしたあとで、大胆にも「価の高い」ものとは何か、と主にたずねます。すべてを捨てて主に従った者は何を受けられるのかとたずねました。すると、あの周知の答えがかえってきます。この世では「百倍のものを受け、永遠の命をうけつぐであらう」。(マテオ19・27、29参照)

このやり取りをふりかえって、聖ペトロの得た答えに照らし合わせてみると、さあどうでしょう。主の約束は成就しなかったのでしょうか。他の人々が、私たちの内的態度や外的行動を見て、どう思うでしょう。実に「百倍」のものをうけた平安を保ち、永遠の生命への希望にみちた生活をしていると思われるはずなのですが、それとも、すべてを捨ててきているように映るのでしょうか。心の中でちょっと疑問をもってみたり、勝手に仮説を立ててみたり、人間的な見方で安全や保証に

1 お告げの祈りのときに、「マリア様と人間の苦しみ」について考えてみたいと思います。

「エルサレムよ、喜べ。マリアのために喜べ、汝、マリアを愛する者よ。」この交誼はイザヤの言葉を教会にあてはめたものですが、童貞聖マリアのよろこびと苦しみの秘義にもびたりあてはまります。マリア様はシオンのまことの娘、古エルサレムの霊的な縮図、キリストの教会の始まりであり頂点であります。さらに新しいエバ、生きとし生けるものの本当の母ですから。



マリア様の苦しみ

マリアはシオンの娘、新しいエバとして、きよの喜びに招かれています。人間の苦しみのわけを理解しようと思えば、失ったしあわせとの関係をみなければなりません。苦しみは、約束されているしあわせとの関連においてのみ理解できるのです。「よろこべ、エ

執着したり、「切るに切れない絆」にしばられたりしていないでしょうか。こういったものにしばられると「危険をかえりみず」に飛びこんでゆくことができなくなってしまう。

苦しみのぬうち

よくご承知のように、すべてを捨てるだけでは充分ではありません。キリストに従うことが必要です。たゆみのない努力を続け、キリストご自身とその使命に一致しなければなりません。この世にありながら、この世のものではない私たちです。人々にとって真理のしるしとなり、キリストの現存を伝えなければなりません。私たちは何もかもすべて、つまり自分の全存在をキリストにささげて、主がいっまでも共にいてくださり、善をおこなってくださるよう願わなければならぬのです。(使徒行録10・38参照)

この奉獻、つまり、「自分のものをもたない」

ルサレム。」

2 預言者たちがうたうエルサレムの苦しみはエルサレムの子供たちの不忠実の結果です。忠実を保たなかったがために、神のこらしめを受け、祖国を追われました。シオンの新しい神秘的な娘マリア様の苦しみは、アダムの子孫の数えきれない罪の結果でもあります。

それら罪のために私たちは天国から追放されることになったのです。

というわけで、マリア様ご自身に救いをもたらす苦しみの神秘が明らかにされたと言えます。人間の完全な連帯とその意義が聖母において啓示されたのです。マリア様はこの上なく美しい御方、無原罪の御方ですから、ご自分の罪の結果として苦しまれるはずはありません。実に私たちのため、全ての人の母と

ことにより、私たちは特別なしるしを手に入れました。それがいわば私たち本来の姿なのです。人としての尊厳を充分保ちつつ、なおかつ「キリストのもの」である、これが私たちの姿です。人々は私たち本来の姿をすぐに認めることができなくてはなりません。最近いろいろな集まりや会合で、すぐに親しく語り合えるようにと、写真と簡単な身分証明のような札を胸につけることが多くなりました。気まずい思いをせずに互いに知り合い、名前を呼び合うことができます。私たちも同じでなければなりません。人々に話しかけやすい印象を与えるよう振る舞わねばならないのです。個人的な話でもいいでしょうし一般的な話でもいい。神父でも、修道士、修道女、神学生でも、とにかく人々が私たちを見、「神に選ばれたもの」である身分をすぐにみとめて話しかけることができるような状態にしなければなりません。

してお苦しみになったのです。キリストが「私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担って」(イザヤ53・4) くださったように、聖母マリアもそのたぐいぬい母性を通して、私たちをふたたび神のもとへ立ちもどらせるために、産みの苦しみを受け入れてくださったのでした。

新しいエバ、マリア様の苦しみは、新しいアダム、キリストと並んで世界の和解のための王道です。「エルサレムよ、喜べ！ 大いに喜ばなさい。すべてあなたたちの悲しみは過ぎ去った」。

3 子供たちの不忠実に苦しみながらも、子供たちの贖いを思いよるごマリアの姿に、苦しみの意味を見出します。私たちも世の贖いというこの上ない宝の一部をなすことができるのです。そうして、人々が同じ宝に与り、贖いをもたらすよろこびをも手に入れることができるように。

福音の清貧を、消費文明といわれる今日の富める社会で実践し、証してゆくのはとても難しいことです。それと同様に困難なのは、この世俗化のすすむ時代において、修道者であること、絶対である神のものであること、を認めてもらうことです。人々の価値判断をひっくり返すような特殊な場合を除けば、人びとをみな同様にみならず傾向が広く行きわたり、それがかえって人々の匿名性というか、人々の自ら何者であるかを示さぬ態度を助長していると言えます。自らをかくすとまでは行なくても、少くとも目立たずに過ごしたいと望む人が多くなっているのです。キリストの呼びかけに応じて生きてゆくには、この世の「塩」となり、「光」となる必要があります。また、主のお言葉を忘れるわけにもゆきません。「人々の前で私の味方だと宣言する人を、私もまた、天にいます私の父のみ前で、その人の味方だと宣言しよう」。(マテオ10・32)

説教・講話・書簡等の抄訳

みなさん、主はまれに見る御方でしたので、あらゆる悪口の対象になりました。(マテオ10・24参照) 弟子たちも先生と同じく中傷されるのが普通です。初代の弟子たちがそうでした。「使徒たちは、み名のために辱められるのに足るものとされたことを喜んだのです。(使徒行録5・42) 教会に属する現代の人はみな、弟子として、これを証ししてゆかなければなりません。

内的自由と霊的自由

神と人に対して忠実を保つには、内的にも霊的にも、自由でなければなりません。そうすれば誰もがキリストの使命に参加して効果的な働きをすることができるようでしょう。この使命を果たすための贈りものが、みなさんの召しだします。みなさんは神の国のために働くように召しだされたのです。さてここで、使徒職と司牧に挺身すべきことについて話をすすめたいと思います。

教会のなすべき仕事や教会内における仕事は多種多様であります。簡単でしかも目立たない奉仕もあれば、修練を要し、かつ様々な条件に属する人々と一緒に果たす仕事もある。実にさまざまですが、いずれもみな、人間と深いかわりのある事柄ばかりです。そこで、あらゆる種類の必要と要求に応えるために数多くの事業が始められました。本日この集いを見渡すだけで、いかに多様な方法で神の国に仕えることができるかがよくわかります。それは同時に教会の生命力が尽きることはないということの証明でもあります。(…)

しかし、共通分母というか、教会内でキリストの使命により福音宣教を果たすための、第一にして最も効果的な手段と言えは、それはやはり各人の生活の証しということになります。他の手段や方法によっても、大なり小なり影響を受け福音の教えを受容する人がでてくることでしょう。しかし、司祭であり、修

道者であるみなさんが人目につかないとか、ましてや忘れられてしまうというようなことになれば大変です。たとえ正当な理由があっても世俗の仕事に従事しなければならぬとしても、それはあくまでも補助活動であって、みなさん方の最も重要な役割より優位に立つことがあってはなりません。

自分が何ものであるか、つまり、自らの姿を決して隠さないでください。みなさんが果たすべく召された聖務や使徒職の目的は何か、これを忘れないでください。それはすなわち現代に生きる人々を日々、至聖なる三位一体との交わりに導くことでもあります。最近とみに、財産を所有したり知識を増したり特権や権力を得ることに安心を求めようとする誘惑が強くなってきました。みなさんは、修道会に属し、キリストに自らを奉獻し、その結果負うことになった義務を忠実に果たしてください。清貧と貞潔と従順の徳を生き活きとさせたいと思います。

教会はなによりも祈りの共同体です。神の民が解放されたのは神礼拝を行なうためでした。贖われた人々は神礼拝、賛美の典礼、神によみせられる犠牲を一生の中心にしなればなりません。

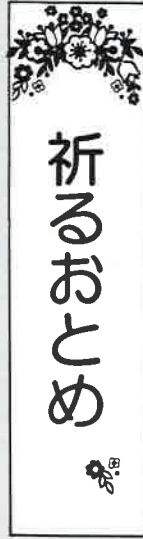
私たちの生活と世界全体を賛美の犠牲に変えるのは人間のわざではなく、神の御働きであります。司祭であるキリストとその犠牲と祈りに心を合わせ、全宇宙と共に私たちが主へのささげものとなります。

信者の本質は礼拝の共同体を作りあげることです。教会で、家庭で、生活の中で、使徒職を果たします。使徒行録は初代の教会の基礎が「祈り」であることをはっきりと語っています。「彼らは使徒たちの教えること、兄弟的な一致、パンを裂くこと、祈りをするこ

せ、そうすることによって、人々が間違ったところに安心を求めることのないように、警告を発していただきたい。四終に目を向けさせ、「天の国」へ向かうよう教えてあげて欲しいのです。みなさんは「天の国」のために愛する力を奉獻したのですから。

司牧や使徒職がどの程度うまくゆくか、それはひとえにみなさんがどれほど忠実を保ちつつ愛するかによって決まってくるのです。心を自由にし、キリストと世界中の主の兄弟姉妹への愛を燃え上がらせるのは、この忠実であります。(『ペルフェクテ・カリターテ』参照) ところで忠実を保つには、主に一致し、たえず新たな心で祈りをつづけ、秘跡にあずかり、この上なくすばらしい恩寵の生活を維持しなければなりません。「私がいなければあなたたちは何もできない」とおせになったのは主ご自身ですから。

さてここで、本日の話の核心に触れましょうに専念した。…また心一つにして毎日神殿に参り、家で、パンを裂き…こうして主は、日々この団体に救われるべき何人かを加えられた。(使徒行録2・42、46・47) 「そして婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちと共に、みな心を合わせて祈り続けていた。(同上1・14)



祈るおとめ

祈る信者の共同体にはマリア様がおいでになります。が、信仰の芽生えの時だけでなくつねにいらっしやいます。「マリアは(祈るおとめ)です。彼女がこのような姿であらわされているのは、先駆者ヨハネの母エリザベットを訪ねたときです。マリアはエリザベットを訪ねて、神をあがめ、自分の靈魂をその言葉のなかに注ぎこみました。その言葉は謙遜と信仰と希望を表わすも

う。たとえば、神と共にすくす生活と人々に仕えるための活動との間に、完全な均衡が取れていないとします。どうなるでしょうか。福音を宣教するという私たちの務めだけでなく、福音を宣教された者としての私たち自身のレベルにおいても、妥協することになってしまいます。王国のために働く人々の真髄は祈りなのです。すなわち、ご聖体を中心にした典礼の祈り。ところで、ご聖体を清い心でふさわしく拝領するには赦しの秘跡の力を借りねばならないし、赦しの秘跡は他の何ものをもつても換えることのできないゆえ、深い信仰の心で与らねばならない。さらに、教会の祈りがあります。教会の祈りは霊と真のうちにたえず続ける神礼拝に抑揚を与えてくれます。しかも、マリアの愛にみちた現存を保ちながら祈ります。聖母こそ、神のはしめ、主に仕えんとするすべての者の模範です。(一九八二・五・十三)

のでした。この祈りがマニフィカトなのです。これはマリアのもっともすぐれた祈りであり、救いの時を告げる賛歌でもあります。そこにみちあふれているものは、古いイスラエルと新しいイスラエルとの喜びにほかなりません。(『マリアーリス・クルトゥス』18) カナにおいても、高間においても、マリアは祈るおとめとして姿をあらわします。「マリアのこの姿は初代教会をはじめ、あらゆる時代を通じて、教会において現存しています。というのは、天にあげられながらも、彼女はとりつきと救いにかかわる使命を決して断念したわけではないからです。(同上18)」「(祈るおとめ)という名称はまた、教会にもあてはまります。というのは、教会は毎日その子供である信者が必要とするところのものを父である神に提示しては、『絶えることなく主をたたえ、世の救いのためにとりなしを行なっている』からです。(同上18)(十二・十三)

不変の教え

私たちの母マリア

聖書のことばを読めば、あらゆる国のどの教会にも処女マリアが共にましますという秘義を理解することが出来ます。

聖ヨハネ福音書を開くと、マリアが十字架の下におられること、また、マリアこそ弟子たちの母であると宣言なさったイエズスの最後のお言葉を思い出します。イエズスは、「婦人よ、これがあなたの子です」と言われ、ついで弟子に向かって、「これがあなた之母だ」と言われた。この時から、その弟子はマリアを自分の家に引き取った。(ヨハネ19・26、27)

イエズスの時、御母の時、教会の時と称されるその大切なときに、贖い主の御口から出た言葉は厳肅な調子を帯びて文字通り実現しました。マリアはキリストの弟子たちの母、すべての人々の母となられたのです。神なる師の教えを信じて受け入れる人なら誰でも、母としてマリアを迎え入れる特権と幸運を手に入れます。主のお言葉を忠実に実行したマリアが、キリストに従うすべての人の母としての役目を、喜んで引き受けてくださることを確信し、私たちは信仰と愛の心で、自分の最愛の御方としてマリアを受け容れます。こうして信仰の夜明けに、福音宣教の各段階において、また教会が誕生する毎に、マリアは、教会を構成する人々、つまり、イエズスをみならう人々の母としての座を占めておられるのです。

使徒行録には次のように書かれています。「婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちと共に、みな心を合わせて祈りつけていた。(使徒行録1・14) 教会が誕生する五旬祭に弟子たちの御母は母親らしい心で彼らを一つの精神、一つの希望において一致させてくださいました。いと高きところから来たるべき御力、イエズスの教会に生命を与える聖霊を大歓迎できるように

弟子たちを強めてくださったのです。

教会の教父たちがすでに指摘しているように、この聖母の現存には深い意味があります。「教会は、イエズスの母マリアと彼の兄弟とともに高間において一致していた。したがって、教会は、彼の兄弟たちと共にわれらの主の母マリアをふくむのでなければ、教会とは言えないだろう。」(『マリアーリス・クルトゥス』28)

このことと同じく、中央アメリカを通過してメキシコからアルゼンチンに至る地でも、教会が一つ誕生するたびにグアダルーベと同じことが起こります。独特なかたちで聖母がご自分から現存をお示しになるか、あるいは、キリストに従う人々が聖母の現存を求めて教会をたて、聖母崇敬に心をつくし、その結果、兄

何でもあの人の言いつとおりになさい

弟愛を保証し聖霊をよろこんで受け容れるための準備をさせてくださる聖母が、つねに教会に現存してくださるように努めてきました。

マリアはたぐいなき御方

マリアこそ福音が余すところなく実現した御方です。聖母は教会の傑出したメンバーであり、欠けるところのないお手本であります。「教会憲章」53) マリアは最初のキリスト信者であり、御子イエズス・キリストを告げ知らせ、私たちにお与えになる方、至福にみちみちた方、イエズスの弟子の申し分ないひな型です。

マリアはイエズスの福音を総合して具現する御方ですから、みなさんの間でマリアは信仰の母であり導き手として敬われています。

キリストのみ教えに忠実を保つための苦しみや戦いのさなか、つねに助けの手を差し伸べてくださるのは聖母マリアです。マリアは子供たちを離ればなれにするあらゆる違いをのりこえて全員を召集し、神のお言葉とご聖体の食卓を囲む一つの家族にまとめ、何ものをも恐れずに安心して生きることのできるよう助けてくださいました。

ペンテコステのあとにも先にもイエズスの使徒たちの心と霊を一つにすることができたのはマリアをおいてほかにありませんでした。(使徒行録4・32、1・14参照) 教会を愛で支配し、苦しむ人がまっ先に誰よりも深く愛される家族にする使命をイエズス・キリストご自身が御母にお任せになったかのように。信仰と洗礼を通してイエズスの「弟子」となり、「兄弟」となった私たち

全員の交わりの絆、無限の愛のお手本、それが聖母マリアなのです。マリアは「新しい女性」でもあります。神はマリアの中に、母性的に責任をもって協力し、自らを与え尽くして贖いの秘義に奉仕する御方が、人間的にもどれほどすばらしい輝きをもつかを神は示してくださいました。

愛の輪郭と三位一体との交わりに招かれた人間の尊厳をお示しになりました。超自然的な美しさと聡明さに飾られた御方、また、積極的に責任をもって協力し、自らを与え尽くして贖いの秘義に奉仕する御方が、人間的にもどれほどすばらしい輝きをもつかを神は示してくださいました。

マリアは母でありお手本

女性、妻、母であるマリアを考えれば、マリアの女性としての姿が、女性の心、女性の尊厳奨励、社会と教会における女性の参加などに、いかに深い影響を与えたかに気づきます。

できます。マリアの言葉に素直でなければマリアを母として余すところなく信じることはできません。マリアの言葉は、心して従うべき真理の教師イエズスを示しているからです。「何でもあの人の言うとおりにしなさい。」マリアは御子を両腕に抱き、あるいはその眼差しでイエズスをお示しになりながらこう繰り返されます。

マリアは神のみ旨を信じたために(ルカ1・45参照) 得たしあわせ、神のお言葉を心にとどめて実行に移したために(ルカ8・21参照) 得たご自分の至福に、私たちが共に与れるよう望んでおられます。お言葉を心に留めて生きること、マリア信心の秘密がここにあります。私たちがマリアの母性愛にひたらせ、こうしてマリアが私たち一人ひとりの中にキリストを形成してくださるための信心の秘訣であります。

ですから、憎しみ、暴力、不正、失業、イデオロギーのおしつけなど、福音に反するものはなんであれすべてはねつけなければなりません。いずれも男性、女性の尊厳をおとしめるものであるからです。反対に、愛徳、相互扶助、信仰教育、文化、貧しい人々を向上させること、すべての人々、特に貧しい人々、苦しむ人々、差別されている人々を尊敬することなど、天に在す御父のみ旨にかなうことすべてを奨励しなければなりません。マリアの子供たちを侮辱したりひどくあしらったりしながら、その母であるマリアにご保護を祈り願うことなどできる道理がないからです。

主の遺言に忠実な聖母は、困っているとき、困難に直面しているとき、いつも私たちのかたわらにおられ、その母性愛と力強い御取りなしを保証してくださいます。マリアは「主の貧しい人々のうちの一人」(『ルーメン・ジュエンツイウム』55参照)で、貧しい人々、苦しむ人々のそばにとどまり、彼らを支え慰めてくださるのです。(三・八)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 下部以上の一括購入なら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393